メディア議員の出世

―関和知と『新総房』を例に―

河崎吉紀

一　はじめに

　本稿の目的は、千葉県の国会議員・関和知を例に、新聞記者から政治家になる過程を取り上げ、メディア議員の出世において新聞社が果たした役割を明らかにすることである。関和知が雑誌『新総房』を日刊紙に成長させる、およそ一八九〇年代を対象とする。

　新聞雑誌、映画、放送などメディア業界出身の議員は、おもに二つに分けられる。一つは、記者や編集者、ディレクターとして実際に現場で働いた経験をもつ議員、もう一つは、新聞社や雑誌社、放送局を経営した議員である。しかし、若い頃に記者として活躍し、その後、市会議員、県会議員となって国政に進出した場合や、数多くの事業を手がける実業家が、その一つとして新聞社を所有している場合など、国会議員の経歴は複雑で、端的に「メディア業界出身」と言い表せる者は少ない。彼らがメディアに関与した順序、期間は多様で、政界への進出におけるメディアの重要性は、個々の経歴を分析しなければわからない。

　井上義和は戦前の長野県を例に、その諸類型を検討している[一]。そこでは、政党に連なる新聞で自ら政論を発表する政治家と、報道を中心とする商業新聞に経営者として関与する政治家に分けて考えている。後者は政治システムから一定の距離を保つが、報道という

社会的影響力をもつことで、間接的に政治的な力を高めるという。やがて、政論よりニュースが重視される時代が来ると、全国紙の特ダネ競争で実績をあげた記者が政界への足がかりを得るようになる。松尾理也は、経営者ではなく取材記者から政治家へ転身するという「政治部ルート」を扱っている(二)。また、白戸健一郎は、普通選挙時代のメディア議員を検討し、選挙の勝敗が候補者の認知度や有名性に左右されるようになったことを明らかにした(三)。その点で、政治家はメディアへの依存度を高めていったといえる。

　このように、メディア業界から政治家への過程は多様であるが、いくつかに類型化できる。このうち、本稿で取り上げる関和知は、政党機関紙から政治家へ転身した一人である。ただし、地方名望家として新聞社の経営に参画したのではない。貧しい家庭に育ち、なんら資産をもたないまま政治家への志を立てた。どのような条件が、裸一貫の地方青年を国会議員にまで押し上げたのか、ここでは関和知が立ち上げた『新総房』というメディアを手がかりに、その足跡をたどりたい。

　すでに千葉県の新聞史については、いくつかの業績が存在する。なかでも、元千葉新聞主筆の加瀬俊雄が一九五六年、『新聞研究』六〇号に載せた「千葉県新聞史」が詳しい(四)。千葉県初の新聞と言われる『木更津新聞』の創刊から一九四五年の『千葉新聞』まで、新聞社の興亡が手際よくまとめられている。これは「地方別日本新聞史」という連載の一部であり、同年、発行された書籍『地方別日本新聞史』に収録されている(五)。そして、加瀬はほぼ同じ内容を、約二〇年後に「新聞界今昔」として『千葉市風土記』に再掲している(六)。ただし、いずれも参照した文献の出典は明示されておらず、その根拠を辿ることはできない。

　また、大沢中「房総の新聞興亡史（一）」、「房総の新聞興亡史（二）」が『房総展望』に短い記事として残されている(七)。これは、明治期から大正期にかけての『新総房』『東海新聞』『千葉毎日新聞』について、元千葉日日新聞社長の大沢が記憶を頼りに回想したものである。

ほかに、一九五六年一一月、千葉県読書週間の一環で県立中央図書館が「房総新聞史料展」を開いたときのパンフレットがある。そこに「千葉県新聞小史」として、『木更津新聞』から第二次世界大戦の新聞統合、戦後東京紙の進出などがまとめられている（八）。千葉県が編纂した『千葉県史』にも新聞に関する記述がある。たとえば、大正昭和編では「新聞界の動向」という節で、二〇世紀に入ってからの東京紙の進出、『東海新聞』『新総房』『千葉毎日新聞』の活躍などが描かれている（九）。

こうしたなか、千葉新聞史の焦点は、もっぱら一八八一（明治一四）年創刊の『総房共立新聞』に合わせられてきた。神尾武則は明治一〇年代における千葉県で「唯一の民権派政論新聞」と位置づけ、発刊にいたるまでの過程を自由民権運動との関連で詳細に分析している（一〇）。また、その紙面に踏み込んだ論考として、神尾は「総房共立新聞の論調と民権運動」「総房共立新聞の論調と民権運動（続）」を発表した（一一）。同紙の民権論を憲法制定、国会開設を主張する第一期、経営が軌道に乗り地方政治を中心とする第二期、そして自由民権運動への取締りが厳しくなる第三期に整理した論考である。ほかに、矢嶋毅之「総房共立新聞社の経営状況」がある（一二）。芝山町の清宮家文書を用いて、『総房共立新聞』の購読者、広告収入、社員の給料などについて明らかにしたものである。また、創刊者の桜井静との関係を取り上げた研究に、佐久間耕治「桜井静と総房共立新聞」がある（一三）。桜井は一八七九（明治一二）年六月に、「国会開設懇請協議案」を全国に配布したことで知られる自由民権家である。佐久間は地方自治に関する社説を検討し、国会開設を目指す動きとの関係を明らかにした。

このように千葉県新聞史は新聞社の興亡史を中心に概要がまとめられているほか、とりわけ桜井静を中心とした『総房共立新聞』の研究が進んでいる。しかし、その後の政党機関紙について、まとまった記述は少なく、十分な検討が加えられてきたとは言い難い。

そこで、本稿は自由民権期以降に創刊された『新総房』

をとりあげ、その後の千葉県新聞史を補足するとともに、次世代の青年がメディア議員として政界へ進出するにあたり、どのように新聞というメディアを利用したのかを、創刊者、関和知を中心に明らかにする。

二　自由民権運動の世代

（一）関和知の生い立ち

一八七〇（明治三）年一〇月一七日、千葉県長生郡東浪見村の綱田に、関和知は関八蔵の長男として生まれた。千葉県の東にある長生郡は一宮川が九十九里の平野から太平洋へと注ぎ、穏やかな気候をもつ。南のほうに東浪見村がある。関和知は終生この村を気にかけ、平穏に治まることに意を尽くした。

　もとは富裕な農家であり、関和知は綱田小学校を卒業して太東村にある椎木小学校の高等科へ進んだ。今日でも有名な千葉県の梨は、父、関八蔵が東上総に初めて栽培したという（一四）。八蔵は地方名望家として政治にもたずさわるが、事業に手を出して失敗し、やがて家は没落してしまった。関和知は中学校への進学をあきらめた。

　近くに芦村塾という郷校があり、関和知はそこへ通って太田和斎の教えを受けた。太田は現在の千葉県茂原市芦網に生まれ、江戸に出て学問を修め、一八五七（安政四）年に浅草で塾を開いた。尊皇の儒者であり、幕末に清川八郎、安積五郎らの志士と奔走したことがあった。そのため、江戸から追放されて郷里に戻り、一八七五（明治八）年、二宮本郷村の自宅に私塾を開いた。小学校を終えた者を受け入れた。石井菊次郎、鵜沢総明、関和知、飯高弥市がその四天王とうたわれた（一五）。石井は第二次大隈重信内閣で外務大臣を務め、鵜沢は関和知の同窓でのちに衆議院議員となる。教え子たちは一九二一（大正一〇）年、師を偲び、太田の碑を旧茂原公園に建立している。

　関和知は本名とは別に白洋と名乗った。白洋とは百から一を引いて九十九、故郷九十九里の海から作った。

太田和斎の漢学塾で学ぶかたわら、小学校の代用教員を勤めた。勤めてから一年後に、教員検定試験に合格して訓導となる。一八八六（明治一九）年一〇月から翌年まで綱田尋常小学校の校長を勤めた（二六）。この教員時代に為子と出会い、長女をもうける。関為子は農作業に精を出し、夜は裁縫などをして関和知を支えた。彼の給料は将来、大学で学ぶという志のために取って置かれた。

関和知は教員を辞めて上京した。壮士の首領であった長谷川逸刀を頼って、そこから多少の生活費を支給され（二七）、同じく千葉県師範学校の附属小学校で教えていた浦辺襄夫とともに東京専門学校邦語政治科へ入学した。彼らは牛込馬場に汚い部屋を借りて自炊を始め、早稲田へ通うことになった。生活は貧しく蚊帳を買うお金もなくて、二人は浴衣を天井から吊して代わりにする始末であった。

同居人の浦辺襄夫は、入学してから大隈重信をはじめさまざまな人に会って教えを請い、周囲から熱血的と評価される活発な学生だった。関和知は学業優秀で同窓の模範となった。そして、一八九五（明治二八）年に関和知は東京専門学校を優等の成績で卒業した。

（二）千葉県の新聞

関和知は卒業後、千葉町に引っ越して、千葉県改進党の機関紙である『千葉民報』の記者となる。ここで時間を少し遡り、千葉県における新聞の歩みをふり返っておこう。

千葉県は最初、木更津県、印旛県、新治県に分かれており、そのうち木更津県の新聞が千葉で初めての新聞とされる。一八七三（明治六）年一月に創刊された『木更津新聞』である（二八）。木更津県庁が発行した冊子型の新聞で木版刷りであった。たった一号だけ発行されて廃刊となり、数か月後の一八七三年六月一五日、木更津県、印旛県が合併して千葉県が誕生する。

政治の中心は千葉町へ移った。そこで千葉町の開智社から一八七四（明治七）年七月、『千葉新聞輯録』が

創刊され、これを継承する形で一八七五年一月に『千葉新報』が東京博聞社の千葉分社から発行された(一九)。発行人は股野潜という。博聞社は長尾景弼が一八七二年九月に東京で創立した出版社で、京都や大阪、千葉、埼玉に分社があった。股野は長尾の弟で共同経営者である(二〇)。播磨国から出て若い頃、鳥羽伏見の戦いにも赴いたことがあるという(二一)。廃藩置県のあと上京して、その後、千葉町に移り博聞社の分社を引き受けたのである。のちにこの分社は積成舎と名を改め、県庁などから仕事を受け印刷業を続けた。『千葉新報』は小新聞として軟派な記事を多く載せたがあまり売れることなく、一八七五年九月に廃刊となり、その後しばらく新聞の創刊は途絶えた(二二)。

そして、千葉県の自由民権家、桜井静が新聞の創刊を考え始める。彼は一八七九(明治一二)年六月から全国の府県会に宛て「国会開設懇請協議案」を約一万枚送り、新聞に広く掲載され有名となった。全国の県会議員をまとめ東京で大会を開き、そこで国会を作る法案を考え、政府にその実現を求めるという内容である(二三)。桜井は捕らえられ二〇日間服役し、その後、郷里の二川村に戻り、新聞の発行を企てるようになった。一八八〇年一二月、千葉県会議員の懇親会に乗り込み賛同を取りつけた(二四)。そのとき作られた総房共立社仮規則には、のちに関和知を支えることになる関五郎右衛門や国松喜惣治らの名前も記されている(二五)。

しかし、博聞社の千葉分社を運営する股野潜に先を越された(二六)。股野もまた自由民権家であり、『千葉新報』が廃刊となってから書籍や新聞の取次をしていたが、一八八一(明治一四)年二月に『千葉公報』を改めて創刊した。桜井静は県会議員に一株一円で出資を募っていたが、資金はなかなか集まらなかった。結局、桜井は股野に交渉して、一八八一年五月に『千葉公報』を譲り受けることを明らかにした。こうして『千葉公報』は一八八一年五月三一日の五二号で終刊となった(二七)。

一八八一(明治一四)年六月一二日、『総房共立新聞』が創刊された。桜井静が社長となった。池田栄亮、白井

喜一郎、関五郎右衛門、成島巍一郎、板倉胤臣、武本章三郎、片岡治躬といった県会議員が応援し、後に自由党系で活躍する板倉中も発起人となり株主であった。豪農の永井伝十郎などを含め(二八)、株主は数千を集め、読者も三〇〇〇人ほどいたという(二九)。『東京横浜毎日新聞』から西河通徹を呼び局長を任せ、『朝野新聞』からは門田正経が移ってきた。また、編集長の清水粂之助も『千葉公報』時代からの記者で、自由民権家であり、集会条例などに違反した経験をもっていた。股野潜は営業を引き続き担当し、会計は国松喜惣治が務めた。「総房共立新聞には、徹夜で議論に明け暮れることも辞さない血気盛んな若者が数多く出入りした」というように(三〇)、民権派の新聞として急進的な紙面となった。

一八八二(明治一五)年六月に集会条例が改正され、自由民権運動への弾圧が強まると、『総房共立新聞』の論調も過激化していった(三一)。一八八二年六月一〇日、発行停止を受け、その後七月一九日に再び発行停止となり九月四日まで許可は下りなかった。三度一〇月一二日に発行停止となって「理財ノ道困迫ヲ極メ今ヤ朝夕ヲ計ル能ハザル危機ニ遭遇」することになった(三二)。股野潜は博文社の長尾景弼に相談して、『東海新聞』という身代わり新聞を出したがこれも弾圧されて一〇号で廃刊となった。こうして計三回延べ五〇日以上の発行停止処分を受け(三三)、一八八二年一〇月二一日に桜井静は廃業届を提出した。一一月付の総房共立新聞社決算報告には、しばしば発行停止を受け非常な損失を出したため維持の見込みが立たないので、協議の末、廃業に決したことが記されている(三四)。このときすでに局長の西川は『自由新聞』へ、門田は『山陰新聞』へと移籍していた(三五)。

一八八八(明治二一)年四月、『東海新報』が創刊された。東海新聞社の刊行だが先の身代わり新聞とは別物で、板倉中が発行した自由党系の新聞である。板倉は弁護士で、一八九〇年の第一回衆議院議員総選挙に当選し代議士となる。編集長は桑原周重が務めた。東京の新聞との競争で経営は常に苦しかった。板倉が国政に

出たので大橋民之丞が経営を受けもつ（三六）。一八九二年二月に一か月の発行停止という弾圧を受け、立て直しのために翌年八月に加藤久太郎（梅泉）が社長になると（三七）、一八九四年一二月に『東海新聞』と名称を改めた。

一方、改進党系は一八八八（明治二一）年四月に狩野揆一郎が『房総新聞』を創刊して『東海新報』に張り合った（三八）。雀巣子『千葉繁昌記』には「千葉町に於て発行する所の新聞は二あり一を東海新報と云ひ其社は県庁の前に在りて其主義は自由也、一を房総新聞と云ひ其社は公園の前に在りて其主義は改進也、房総新聞は目下休刊中にて人或は評して曰房総新聞は器械に油が切れて運転覚束なしと、然れども可否信偽は雀巣子保証仕らず」というように（三九）、やがて『房総新聞』は、『東海新報』に競争で敗れ廃刊した。

（三）改進党系

約七年後に、関和知は改進党系の雑誌を創刊し、再び自由党系の『東海新聞』に闘いを挑むことになるのであるが、それはまだ先の話である。まずは彼を支えた改進党系の地方名望家たちを紹介しよう。

桜井静の『総房共立新聞』にも名を連ねた関五郎右衛門は一八三九（天保一〇）年、関和知と同じく長生郡東浪見村の綱田に生まれ、関和知にとっては叔父にあたる（四〇）。関家は代々豪族として幕政に仕えた家柄であった。関五郎右衛門は一八八三（明治一六）年から一八八六年まで長柄上埴生郡の郡長を務め（四一）、その後、千葉県の兵事課長、そして県会議員となって活躍した。第一回衆議院議員総選挙で候補にあげられたが板倉胤臣に破れ落選した。一九〇二年の第七回総選挙でも、六〇歳を超えて駆けずり回り、有権者の門を叩いて熱心に選挙運動を展開した（四二）。『新総房』は「関氏が旧進歩党の頃より苦節二十余年千葉県の政界に貢献する処多大なりしは何人も争ふ能はざるの事実」と記して応援したが（四三）、結局、関五郎右衛門の当選は適わなかった。「時利あらずして不幸失意の人となり、終ひに候補

を断念して爾来一意実業に従事せし」と記された(四四)。晩年は一宮海岸に青松館という旅館を建てて過ごした。一九一一年一二月に七三歳で没している。自身は国政の表舞台に立つことができなかったが、関和知を始め、後進の面倒をよく見て新しい世代が活躍することを助けた。

一八九四（明治二七）年一月六日、千葉町梅松別荘にて改進党の千葉県支部が発会式を行った。午後一時、着席した一同を前に宇佐美佑伸が立って開会の趣旨を述べ、関五郎右衛門は推されて会長となり、四宮有信が議案を説明して午後三時に支部規則などを定めると、その後の懇親会では関五郎右衛門は演説を行っている(四五)。一三日は木更津町での会合に出席し、種々の意見を述べ、二〇日は芝公園の紅葉館で開かれた改進党の懇親会に参加した。二五日、関五郎右衛門は『千葉民報』の社用で上京していたが、第三回総選挙の候補者を選ぶため小鷹狩元凱と銚子町に出向き、三〇日に『千葉民報』に帰社している(四六)。「小生へ御文通被下候方ハ千葉民報社へ宛御発シ被下度」と広告を打ったように、関五郎右衛門の拠点は『千葉民報』にあった(四七)。

総選挙後の一八九四（明治二七）年五月五日、神田錦輝館における改進党臨時大会に関五郎右衛門の姿があった。事務所の維持や大会の費用を、関五郎右衛門や宇佐美佑申、浅井蒼介、藤代市左衛門ら千葉県の支持者たちも負担した(四八)。このうち浅井は弁護士であり、のちに千葉県改進党系の長老となる(四九)。浅井は桑名藩士の家に生まれ、明治維新のあと大蔵省租税局に勤めた。官吏を辞めて高梨哲四郎の下で代言人の修行をし、和仏法律学校を卒業して弁護士となった(五〇)。嚶鳴社に入ったことから改進党を応援するようになる。

一八九四（明治二七）年一二月一一日、午後一時より梅松別荘にて改進党千葉支部の臨時評議会が開かれた。常務委員として宇佐美佑申、浅井蒼介も参加した。同日、川本三郎を招いて千葉町で演説会を開き、関五郎右衛門らが彼を出迎え梅松別荘へ案内した。午後六時から始まった演説会に聴衆八〇〇人がつめかけた。その後

の懇親会には千葉町の弁護士、新聞記者ら集まった(五一)。

改進党系で志を同じくする者に宇佐美佑申がいる。一八六二(文久二)年、江戸の藩邸に生まれた(五二)。父、宇佐美藤一郎は静岡県の士族であった。佑申が六歳のときに亡くなり、母も亡くして、彼は一人、静岡で育てられた。静岡師範学校を出て、貧しいなか代言人の食客となり、和仏法律学校に学んで弁護士の試験に合格、千葉町に移り事務所を開いた。「義侠心に厚く能く細民の権利を弁護す」と伝えられる(五三)。一八九三(明治二六)年八月二三日、千葉県の八幡で改進党の演説会が開かれたとき、宇佐美も参加し時事問題を論じている(五四)。一八九三年一二月に改進党千葉支部の設置が決まったとき、宇佐美は支部規約の起草委員となった(五五)。号は主竹といい、俳句を趣味とした(五六)。のちに彼は関和知を助け『新総房』の理事や顧問、社長を務めることになる。一貫して改進党系に属し、一九〇九年において進歩党千葉支部の幹事となり、このとき千葉郡会議長でもあった。一九一〇年の『新総房』では国民党の千葉「支部の先輩元老を以つて任じ」ていると記されている(五七)。衆議院議員を勧められることもあったが、自らは表だって立つことなく、改進党系の勢力の一人としてたえず後進の支えとなった。

三　新世代の拠点

(一)　雑誌『新総房』

一八九四（明治二七）年一月、『千葉民報』が千葉町に創刊された。発行人は関善次、編集長は長竹寅松である。関善次は千葉県夷隅郡総野村の出身で、中村正直の同人社で英漢学を学び、一八八九年に東京専門学校に入学、一八九一年に卒業後、関五郎右衛門らとともに新聞を作ることにした。『総房共立新聞』で会計を担当していた国松喜惣治も援助を与え(五八)、立真舎で印刷を引き受けた。東京専門学校の最初の卒業生で関和知の先輩にあたる齋藤和太郎が主筆となり、また、関五郎右衛門も社主を務め、自らも「千葉盛衰記」などを執筆し

た(五九)。ほかに早稲田出身の菊池悟郎、浅川由雄がおり改進党系、早稲田系で牛耳られた新聞であった。

ここで国松喜惣治について少し触れる。もと佐倉藩御用達の薬屋を営む家で、明治に入って牛乳を販売、氷を製造するなど、新しい事業に積極的に取り組んだ起業家である(六〇)。新聞もその一つであり、一八八二年に立真舎という新聞雑誌売捌の店を作り、その後見となって東京から新聞や雑誌を取り寄せた。『総房共立新聞』の販売も請け負っていた。一時は千葉県下に勢力を広めたが、その後、うまく行かず多額の債務を抱えたという。一八八九年に立真会社という株式会社に改め、以降、新聞販売の事業を軌道に乗せた。自身は町会議員、区長、学務委員なども務めた。

さて、一八九四（明治二七）年に設置された改進党の千葉県支部は、この千葉民報社内を本拠地とした。支部の役員には宇佐美佑甲、浅井蒼介、三枝八十太郎がいた(六一)。一八九四年七月七日付として、『立憲改進党党報』三〇号には、宇佐美が次のように報じている。「県下我党の機関新聞たる千葉民報は日に益々旺盛を極め、発行部数遙に吏党新聞の上に出で、齋藤和太郎、関五郎右衛門、服部耕雨、上田悟郎の諸氏勉励従事せり」(六二)。

関和知は最初、知齋学人と号してこの『千葉民報』に寄稿していた。東京専門学校を終えて千葉町に移るとその主筆を任された。「当時早くも総房論壇の一偉材を以て認められ未来の大成功を期せられたり」と期待されたが(六三)、駆け出しの関和知は日本製のビスケットにもありつけぬ貧乏で、本を読むための愛用の古い机の脚までもげてしまい、薪を切ってその間に合わせとしただけでなく、その机がちゃぶ台をも兼ねていたというくらい慎ましい生活を送っていた(六四)。当然、『千葉民報』の財政が豊かであるはずもなく、関和知と菊池悟郎、浅川由雄は一〇円ほどを受け取り新聞社の部屋に居候をしていた(六五)。一年ほど経って経営も成り立たず、結局『千葉民報』は廃刊となってしまった。

一八九六（明治二九）年九月二五日に『千葉民報』が廃刊して数ヶ月後、一二月二六日に関和知は進歩党の

千葉県支部機関誌として雑誌『新総房』を創刊した。定価一部一〇銭の月刊誌で、社屋は千葉町一一一三番地にあった。創刊にあたり彼は改進党系の有力者に助力を仰いだ。発行兼編集人が関和知で、印刷人が佐瀬熹六（機堂）である。佐瀬は大正時代にいたるまで『新総房』を支えていく。性格は温厚で勤勉家であり、関和知と協力して雑誌の運営に熱心に取り組んだ（六六）。

関和知は「『新総房』発刊の辞」として次のように記している。『新総房』は三州に於ける政治思想の進歩を企図し、教育の普及、殖産の発達、文学、美術、風俗、慣習の、純潔高尚ならむことを希望する者、而て之を企図し、之を希望すると共に、『新総房』自ら之か唱を為し、進て講究の任に当らむことを期する者也」（六七）。進歩主義の急先鋒となり、革新の味方となって三州の面目を一新すると宣言した。

そして、「実行的時代の政府」と題した論説を掲げた。日清戦後の日本において、自らの立場を国民に知らしめるだけでなく、実際に行動していかなければならないという。伊藤博文内閣とそれを支えた自由党には具体的な政策がないと関和知は批判した。松方正義内閣には実際的な組織、活動を期待する。議会がそれを妨害するなら解散せよと訴えた。佐瀬熹六も「異分子を排除せよ」と題して、松方内閣が進歩党と政策を共有する限りは応援するが、そうでなければ袂を分かつべきと主張した。『東京朝日新聞』には、雑誌『新総房』が「体裁「日本人」に酷似す政治あり文学あり蓋し好雑誌なり臭味は進歩党臭味とす」と紹介されている（六八）。

第二号から関和知は政論に加え、「大日本外交史」と題した古代史を載せ、また、白洋の号で「深堀騒働」という江戸時代の長崎を舞台にした歴史小説のようなものを執筆した。梅松別荘の主人、三和弥三郎は当時を振り返り、元気の良い青年が雑誌を出したいと相談に来たと回想している。「会って話て見ると、人物もしっかりして居るのでこの男なら面白かろうと思って兎に角雑誌を出さうと言ふことになった」（六九）。お金のない関和知だった。先輩や長老から援助を受けなんとか発行

に漕ぎつけた。編集はもちろん、できた原稿を持って東京へ行き、印刷すると発送も自分で手配して、千葉町周辺など郵送費を節約するため自らの足で配り歩いた(七〇)。

自由党系には先に触れた『東海新聞』があった。そこへ進歩党系の『新総房』という雑誌が誕生したので、彼らはこれを敵対視した。『東海新聞』から「故千葉民報の落武者」が発刊した「チョボクレ雑誌」と呼ばれ、「一生一代あらむ限りの悪口雑言」を吐きかけられたと『新総房』は報じている(七一)。『東海新聞』は自由党の「末流」を汲む新聞であると『新総房』が書くと、『東海新聞』は政治上の主義を表明していないと反論した。『新総房』は『東海新報』が『東海新聞』に改称しても、自由党系であることには変わりないと再反論した。自由党系として弾圧されて困窮しているので、政治的主義はないと建前として述べているだけである。それはご都合主義であると批判し、そのうえで『東海新聞』の記者に「其脳髄の昏迷狂乱せる、其心腸の腐敗糜爛せる、其筆端の陰毒兇険なる、其言辞の陋劣野卑なる、識者をして一読嘔吐三斗ならしむるものあり」と罵詈雑言を浴びせかけた(七二)。

『新総房』は四号でも自由党批判を緩めない。議会政治が始まって自由党は「藩閥に謳歌し非立憲的政府に賛同」して目先の利益に目がくらんでしまっている。彼らは「山師的政治家の集合」である。一方で、進歩党は機会を見失ってはいけないという。千葉県は自由党が強いが、進歩党はこの逆境から気勢をあげる機会をつかまねばならない。連絡を密にして、候補者の考えを有権者に伝え、党外の支援を得るように努力すべきと訴えた(七三)。さらに「東海記者の耄碌」という評論を同じ号に載せ、「穢れて汚き腸をもて、悪口雑言をほざくより他に能事無き東海記者」と罵倒することも忘れなかった(七四)。

(二) 千葉県知事・阿部浩への攻撃

一八九七(明治三〇)年二月二五日の『新総房』三号

の巻頭は「収賄事件の真相」である。これは千葉県の尋常師範学校の建設において、建築事務委員が請負人から賄賂をもらい監督を怠ったというもので、記事はこの収賄を取り上げた続報である。無実であれば動じなければよいのだが、当局は周章狼狽しているという。進歩党が些末な事件を大きく言いふらしているという『東京日日新聞』に載った論説の出所は、当局によるのではないかと書き、「阿部氏が本県に就任以来、常に日々新聞を籍りて、兎もすれば手前味噌的の報導を提げ、其治蹟を吹聴するに汲々たりしは、其事例一にして足らず」と千葉県知事を批判した[七五]。今回も進歩党を勝手に疑って憶測を新聞に流したのではないか。収賄については下級役人が裁かれるが、工事は計画と異なっているところがあり、それが裁判中に露見すれば、行政上の責任も問われるだろう。当局も進んで調査し県民に報告すべきであると主張している。

　一八九七（明治三〇）年三月二七日の『新総房』四号でも、引き続き千葉県知事の阿部浩が攻撃された。収賄事件は軽犯罪で処分されることが決まったが、行政当局の責任は免れない。予審のなかで建物が当初の設計と異なると指摘されており、いい加減な工事が行われたことは明白である。「厚顔にして無恥なる我当局者」と阿部知事を批判し[七六]、また、佐瀬熹六も「県政の紊乱」と題して同号に筆を揮い、千葉県民の税金で、教育のために建設されようとしているものが、官吏によってゆがめられている。現在、その事件は司法において決着がついたが、建築計画と実際の工事の相違について、知事の監督不行き届きに対し責任が問われるべきであるとの論説を書いた。

　続く『新総房』五号では「県政刷新の時機」という論説が載り、千葉県政が振るわないのは治者に恵まれていないからだと論じた。ついに知事を辞職して立ち去った阿部浩に対し「累弊積毒殆ど其極に達し」と追い打ちをかけ[七七]、自由党と結託して賄賂を横行させ、公共の利益を放棄して私欲を肥やしたと非難した。一方で、千葉県民が温厚で独立心がないことにつけ込まれてい

るとも述べている。実際、千葉県民の収賄事件に対する関心は欠けていたようで、『新総房』は「冷々淡々他人の事を見るが如し」（七八）、「三度の食事に不自由さへなく暮らして行けば、他の事は「ドーデモ宜イ」」という特色があると書いて嘆いた（七九）。

これまで千葉県政は自由党系が主流であり、歴代の知事と提携して議長、副議長を独占してきた。一八九六（明治二九）年八月に千葉県知事に就任した阿部浩は積極政策を打ちだして自由党系に歓迎されていた。判決下る前に阿部は更迭され、柏田盛文が新たに着任することになった。関和知は白洋の号で「柏田知事」という記事を書き、そこでも阿部を「鼻孔に箸を挟さみ、酒間に狂呼乱跳せる、岡山の勧業課長」と書き、醜悪で卑劣な人物であったとこき下ろしている（八〇）。それに対し、柏田が千葉県知事に来たことで「雲霧を開ひて好山に対するの観」があると期待を寄せた。そこで、関和知は長洲町の千葉県知事官邸に柏田を訪ね、柏田は党派に偏らない政治を行うとあいさつし、師範学校や中学校を視察した感想などを意見交換した。

この間、『新総房』は千葉県各地の報道を強化するため通信員を募集している。印刷所は八重洲橋活版所から秀英舎に変え、総房社から新総房社へ社名も変更したことを報じている（八一）。さらに大売捌所として東金町の萬報社と特約の契約を結んでいる。また、『函館新聞』で記者をしていた早稲田出身の渡辺外太郎（嶽南）を編集陣に加えた。社会面には記者として丸山清（青水）を雇っていた。とはいえ、相変わらず『新総房』にまともな社屋はなく、関和知の住んでいた下宿の八畳間が本拠地で、ボロボロの机に向かって原稿を書き、関和知自らが奔走して資金援助を請い、そうして集めたお金を持って八重洲町にある活版印刷所へ入稿し印刷してもらうというありさまだった。配達の宛名書きまで関和知自身が行っていた。「アノ配達夫が知事を追放した関かい」などとささやかれていた（八二）。

（三）自由党系『東海新聞』との攻防

一八九五（明治二八）年一二月、第九議会において、伊藤博文内閣は日清戦後に膨らんだ予算を成立させるため、自由党の支持を得ようとして成功し、議会で予算案を通過させ、一方、こうした自由党と政府の提携に対抗して、改進党と対外硬の諸派が進歩党を立ち上げていた。一八九六年四月に政府は板垣退助を内務大臣に入れた。八月に大隈重信の入閣を、板垣に反対されて果たせなかった伊藤内閣は総辞職して瓦解した。第二次松方正義内閣が一八九六年九月に成立すると、松方は進歩党の支持を得るため、大隈を外務大臣とした。その結果、進歩党員の多数が官僚として採用された。

『新総房』は改進党系で当時は進歩党に連なる雑誌であった。当然、『進歩党党報』の広告を載せている。「雄大の運動を為して議院に絶対的過半数を制する」ために、一八九七（明治三〇）年五月一日に創刊される予定であるという（八三）。逆に『新総房』も『進歩党党報』に次のような宣伝文を出した。「千葉県に於ける進歩主義の唯一機関にして紛々たる俗人私朋を掃蕩するは新総房の大目的なり」（八四）。また、関和知は新総房社を代表して「今や、堂々たる大政党。奮って国務の責に当り、世界的日本の経営に任ず」と『進歩党党報』に祝いの言葉を贈っている（八五）。関五郎右衛門も望んできた立憲政治が成りつつあると述べ、大いに運動してほしいと祝辞を寄せた。

一八九七（明治三〇）年六月二三日、進歩党は千葉町の梅松別荘で政談演説会と同志大会を開いた。『新総房』のスタッフはこの準備に追われ、七号の発行が遅れてしまった。当日は、大きな看板を掲げ、国旗を飾り、球灯を吊したり、演壇の花瓶に花を生けたりして準備を整えた（八六）。

まず、『新総房』の印刷人として運営を切り盛りしている佐瀬熹六が出て開会の趣旨を述べた。関和知は「自治的国民」と題して約一〇〇〇人の聴衆に向かって演説した。大津淳一郎は「我邦今日の形勢」、尾崎行雄は「内外の急要問題」と題して熱弁をふるう。やがて場内には不穏な空気が漂ってきた。警官があちらこちらに

配置されている。ちょうど千葉県会が臨時に開会されているときであり、集まっていた自由党員はこの演説会をつぶそうと東京から壮士を雇って多数送り込んできた。「何者の卑劣漢ぞ、名士の演説に向て、罵詈喧騒を極め」(八七)、自由党の県会議員や『東海新聞』の記者らが野次馬となって騒ぎ立て、ついに尾崎の演説のとき、臨監警吏に止められて解散となった。自由党に雇われた壮士たちは手をたたいて喜んだという。議論でもって争うのはよいが、騒ぎを起こして言論の自由を妨害し意見を発表させせないのは卑劣であるとして『新総房』は批判した(八八)。また、『進歩党党報』にも郡会議員選挙で自由党が劣勢となり卑劣な手段で進歩党の勢いをそごうとしたのではないかと報じられた(八九)。

演説会は同日午後五時からそのまま同志大会へと進み、佐瀬熹六の挨拶に始まり、議長に関五郎右衛門が選ばれた。当時、日本人移民がハワイで入国拒否に遭うことがあり、日米関係が悪化しつつあった。同志大会は松方正義内閣に強硬な外交路線を求めた。また、進歩党の千葉県支部を設立することを決め、宇佐美佑伸、浅井蒼介、藤代市之輔、関和知、佐瀬が設立準備委員に指名された。そのとき、門馬信義が千葉県における日刊新聞の発行を提案した(九〇)。これについて雑誌『新総房』は「機関新聞無くして政治上の運動を試む、是尚ほ軍艦兵器無くして戦に臨むが如し」と記している(九一)。会場は満場一致で新聞の創刊に賛成した。その後の懇親会でも、尾崎行雄を始め、関和知らも演説を行った。大いに飲んで酔ったあと、尾崎や鳩山和夫らは午後八時二〇分発の総武鉄道で帰京した。その後も宴会は続き、午後一〇時すぎに散会となった。

(四) 日刊紙『新総房』

一八九七(明治三〇)年八月一八日発行の『新総房』八号に「新総房の大拡張」という広告が載る。ここで毎月一回の発行を二回にすることが宣言された。『新総房』の勢力是より倍々振ひ、『新総房』の気焔是より愈々昂るものあらむ」と記されている(九二)。同号の巻頭には

「拡張に際して所感を述ぶ」と題した論説が掲げられ、雑誌『新総房』は発刊して間もないが、数多くの妨害、中傷を払いのけ、すでに千葉県において「社会上の一巨人」となったと自画自賛した（九三）。ここでも尋常師範学校新築工事の収賄事件が取り上げられ、千葉県下の新聞が沈黙して報じないなか、真相を暴露し責任を追及したと実績を記している。「少くとも百二十余万同胞に代りて」千葉県の言論を担うのであると宣言した（九四）。

こうした関和知の奮闘ぶりを見て、田村昌宗と三和弥三郎は銀行から金を借りて（九五）、雑誌『新総房』を日刊紙に改めるほど多額の援助を関和知に与えた。田村昌宗は大隈重信と懇意の間柄であり、もちろん改進党系であった。大隈の先輩にあたる旧佐賀藩士で、戊辰戦争で庄内藩を討伐するとき大隊長となって従軍し、古賀喜三郎指揮の山砲隊の応援を得て戦果をあげ、庄内藩主酒井忠篤を降伏させた（九六）。明治になって陸軍会計一等副監督に任ぜられた。佐賀の乱の鎮圧にも向かう。陸軍を辞めた後、千葉町に移住し開墾地で農業を営んでいた。田村は大隈の境遇に同情するところがあって進歩党を応援しており、大隈自身「竹馬の親友」と田村のことを述べていた（九七）。関和知は長年、田村にかわいがられており、大隈に知遇を得る機会をもらっていた。もちろん、彼が東京専門学校出身であるということもその一つである。田村は十六軒長屋という貧民窟の半分をつぶして新総房社の社屋として提供した（九八）。

一八九七（明治三〇）年九月一日、梅松別荘において進歩党の機関紙発行を相談している。進歩党の同志、志賀吾卿はその資金を集めるのに奔走した。桜井静の援助も受けた。関和知はさらに草履履きで各方面を回って寄付を募った。人格が功を奏して賛同者が増え、一五〇〇円から一六〇〇円ほどが集まった（九九）。こうして雑誌『新総房』は、一〇月一〇日、新聞『新総房』として装いを新たに創刊することになった（一〇〇）。関和知と佐瀬熹六は雑誌『新総房』の第一号を発刊したとき、将来は必ず日刊紙にしようと互いに誓い合っていた（一〇一）。それが実現したのである。

発行人兼印刷人は佐瀬熹六、編集人に関和知と記されている（一〇二）。値段は一部一銭五厘、一か月二三銭、三か月六九銭、半年一円三八銭、一年二円七六銭である。新聞売捌所のリストには、これまで雑誌『新総房』を扱ってきた東金町の萬報社が入っている。広告の取次もこの売捌所が請け負った。発送は東京萬売舎を通して、総武線最終列車で下総へ、房総線の翌日一番列車で上総へ、房州へは汽船で配送することになっていた。

こうしたなか、故意に『新総房』の配達を差し控え、休刊と偽って『東海新聞』を薦める売捌店もでた。新総房社は販売を妨害する者がいれば本社へ連絡するよう告知していた（一〇三）。また、「壮士無頼の徒にして往々本社に関係ある趣を以て人を欺くものある由なれども本社は右等のものに一切関係無之候」と注意を促している（一〇四）。新聞記者のなかには、仕入れた情報をもとにゆすりたかりを行う者もいた。『新総房』の名を語って面倒を起こした者がいたのだろう。

また、新年号の予告には「五千の読者を有するの隆運」と記されている。さらなる発展を目指すと抱負が語られ、鈴木東洲の絵画、関和知の論文が新年号に掲載されると宣伝された（一〇五）。

一八九七年（明治三〇）年一二月一三日に千葉県会が閉会すると、午後一時から進歩党の県会議員と有志は梅松別荘に懇親会を開いた（一〇六）。関和知、高山孝之助、安田勲、池田豊吉、鵜沢宇八、浅井蒼介、佐瀬熹六らも参加した。今期の県会では進歩党が優勢で、自由党員を黙らせることができたと凱歌を上げた。議会の成果を県民に報告書として発表することが決められた。一八九七年一二月一八日には、関和知、宇佐美佑甲、浅井、佐瀬らは、千葉に来ていた関五郎右衛門と、進歩党の大会に出席するため、千葉発の二番列車で東京へと向かった（一〇七）。関和知は進歩党の活動にも積極的に参加し、新聞も順調に発行が継続され、一八九八年一一月二七日には梅松別荘にて爆竹を鳴らし、創刊一周年の祝賀会を催すことができた。当日の紙面は六ページに増刷された（一〇八）。

事業に失敗し、没落した父は、関和知を中学校に進学させることができなかった。小学校の教員となった関和知は、それでも政治家になるという志を捨てず、二つの戦略を用いた。教育とメディアである。

教員を辞めて上京し、東京専門学校を優秀な成績で卒業した後、千葉県へ戻った関和知は新聞『千葉民報』の記者となる。しかし、同紙はほどなく廃刊し、一八九六年一二月、彼は自ら雑誌『新総房』を立ち上げた。すでに憲法は制定され、帝国議会が開かれ、自由民権運動は終わりを告げていた。若い第二世代の関和知らが政界を目指すには、拠点となるメディアが必要だった。

彼らは雑誌『新総房』を用いて盛んに千葉県政の批判を行った。それは知事だけでなく、知事と結託した自由党系の県会議員を攻撃することでもあった。当然、自由党系『東海新聞』との論戦は熾烈となり、その実績を買われ、関和知はやがて改進党系の先人たちに認められていく。千葉県の進歩党には関五郎右衛門、宇佐美佑伸、浅井蒼介らがおり、彼ら自由民権期の政客らは後進への支援を惜しまなかった。

一八九七年一〇月、関和知は雑誌『新総房』を新聞『新総房』へ発展させることに成功する。改進党系の応援はもちろん、自由民権運動で『総房共立新聞』を作った桜井静からも支持を得た。とりわけ、大隈重信と「竹馬の親友」である長老、田村昌宗が多額の資金を集め提供した。

このように、一九世紀末、千葉県における改進党系の世代交代が行われるなか、その結節点となったのがメディアであった。関和知は『新総房』を用いて千葉県政を批判するが、その手法は単なる政論ではない。尋常師範学校の収賄事件など報道の力を用いた攻撃であった。その後も、教科書疑獄事件の報道で知事の阿部浩を追いつめていく。つまり、議会政治の時代に合わせた誌面、紙面作りを行うことで、第一世代が継続できなかった

新聞雑誌の発行を、関和知は軌道に乗せるという実績を示したのである。

また、彼は学歴を政治力へ転換することにも注意を払ってきた。東京専門学校での人脈は、やがて関和知が中央のメディアへ進出する際の助けとなるが、本稿においても、田村昌宗をはじめ改進党系とのネットワークを構築するうえで早稲田出身という経歴は重視されたはずである。

関和知はこのように、教育とメディアの力を用いて千葉県政界での注目を集めたが、彼を国政へと押し上げるにはなお、それらを強化する必要があった。そこで、関和知はアメリカへの留学を決意し、帰国後は『万朝報』や『東京毎日新聞』など中央のメディアへと打って出る。その後の展開についてはいずれ稿を改めて論じよう。

(一) 井上義和「メディア政治家の諸類型―「東の新聞県」長野県選出議員の分析から」佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員―「政治のメディア化」の歴史社会学』創元社、二〇一八年、一〇五-一四一頁。

(二) 松尾理也「ポスト政論新聞・大阪系全国紙の迂回路―特ダネ主義と政治部記者」、同書、二〇三-二三三頁。

(三) 白戸健一郎「普通選挙体制下のメディア政治家―政党政治と「世論」政治」、同書、二三五-二六八頁。

(四) 加瀬俊雄「千葉県新聞史」『新聞研究』六〇号、一九五六年、三九-四六頁。

(五) 加瀬俊雄「千葉県新聞史」日本新聞協会編『地方別日本新聞史』日本新聞協会、一九五六年、一〇三-一一〇頁。

(六) 加瀬俊雄「新聞界今昔」千葉日報社編集局『千葉市風土記―千葉開府八五〇年記念』千葉日報社、一九七七年、二七五-三〇〇頁。

(七) 大沢中「房総の新聞興亡史（一）」『房総展望』七巻七号、一九五三年、二六-二九頁。大沢中「房総の新聞興亡史（二）」『房総展望』七巻九号、一九五三年、三四-三五頁。

(八) 『房総新聞史料展』千葉県読書週間実行委員会、一九五六年。

(九) 千葉県編『千葉県史』大正昭和編、千葉県、一九六七年。

(一〇) 神尾武則「『総房共立新聞』の発刊事情と民権運動」『千葉県の歴史』三号、一九七二年、一四-二二頁。

(一一) 神尾武則「総房共立新聞の論調と民権運動」『千葉県の歴史』一一号、一九七六年、二五-三四頁。神尾武則「総房共立新聞の論調と民権運動（続）」『千葉県の歴史』一二号、一九七六年、三七-四八頁。

(一二) 矢嶋毅之「総房共立新聞社の経営状況」『千葉県の文書館』四号、一九九九年、二〇-二五頁。

(一三) 佐久間耕治『房総の自由民権―歩きながら考え、考えながら歩き続けて』崙書房出版、一九九二年、一九八-二三二頁。

(一四) 小笠原長和、川村優『千葉県の歴史』山川出版社、一九七一年、付録七四頁。

(一五) 田中治衛「太田和斎の思想と教育」『千葉県の歴史』二三号、一九八二年、四四頁。

(一六) 長生郡教育会編『長生郡郷土誌』崙書房、一九七六年、二三〇頁。

（一七）経済之日本社編輯部編『奮闘努力近代立志伝』経済之日本社、一九二四年、一四六頁。
（一八）前掲『房総新聞史料展』、二頁。
（一九）同書、五頁。
（二〇）山田健太編『ジャーナリスト人名事典』明治〜戦前編、日外アソシエーツ、二〇一四年、二三三-二三四頁。
（二一）『随聞随筆総房人物論誌』第二編、博聞館、一八九三年、一三頁。
（二二）前掲、加瀬俊雄「新聞界今昔」、二七八頁。
（二三）前掲、佐久間耕治『房総の自由民権―歩きながら考え、考えながら歩き続けて』、一九九-二〇〇頁。。
（二四）前掲、神尾武則「「総房共立新聞」の発刊事情と民権運動」、一五頁。
（二五）『明治前期政党関係新聞紙経営史料集―定款、決算―株主名簿等』明治史料研究連絡会、一九五七年、二五頁。
（二六）前掲、加瀬俊雄「新聞界今昔」、二七九頁。
（二七）加藤友康・由井正臣『日本史文献解題辞典』吉川弘文館、二〇〇〇年、七三〇頁。
（二八）前掲、佐久間耕治『房総の自由民権―歩きながら考え、考えながら歩き続けて』、一〇頁。
（二九）同書、二〇六頁。
（三〇）櫻井静先生を偲ぶ会実行委員会編『国会開設に尽くした孤高の民権家櫻井静』ぎょうせい、一九九〇年、三九頁。
（三一）前掲、神尾武則「総房共立新聞の論調と民権運動」、二八頁。
（三二）『東海新聞』一八八二年一一月二日、三面。
（三三）前掲『房総新聞史料展』、二頁。
（三四）前掲、『明治前期政党関係新聞紙経営史料集―定款、決算―株主名簿等』、二六頁。
（三五）前掲、神尾武則「総房共立新聞の論調と民権運動」、二五頁。
（三六）前掲、『房総新聞史料展』、二-三頁。
（三七）宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房、一九八五年、四四頁。
（三八）矢嶋毅之「『房総新聞』廃刊後」『千葉史学』五二号、二〇〇八年、九-一〇頁。
（三九）雀巣子『千葉繁昌記』君塚辰之助、一八九一年、二六頁。
（四〇）木内茶庵「葉街操觚界の思ひ出」『千葉毎日新聞』一九一五年一月一日、一四面。
（四一）『房総人名辞書』国書刊行会、一九八七年、五七三頁。
（四二）『新総房』一九〇二年七月九日、二面。
（四三）『新総房』一九〇二年八月一日、二面。
（四四）前掲、『房総人名辞書』、五七三頁。
（四五）『立憲改進党報』二四号、一八九四年、三〇頁。
（四六）『千葉民報』一八九四年二月一日、二面。
（四七）同書、四面。
（四八）『立憲改進党報』二九号、一八九四年、四四頁。
（四九）五十嵐重郎編『房総人名辞書』千葉毎日新聞社、一九〇九年、四三八頁。
（五〇）前掲、『随聞随筆総房人物論誌』第二編、二七頁。
（五一）川本三郎「千葉町演説会の景況」『立憲改進党報』三六号、一八九四年、四一頁。
（五二）前掲、五十嵐重郎編『房総人名辞書』、三三八-三三九頁。
（五三）法政大学大学史資料委員会編『法政大学史資料集』第一八集、法政大学、一九九五年、一三一頁。
（五四）『立憲改進党報』一六号、一八九三年、二八頁。
（五五）『立憲改進党報』二三号、一八九三年、二七頁。
（五六）木村清吉編『房総医家名鑑―附・房総人物名鑑』安井融平、一九一二年、房総人物名鑑三三頁。

(五七)『新総房』一九一〇年五月五日、一面。
(五八)千葉県編『千葉県史』明治編、千葉県、一九六二年、八六八頁。
(五九)前掲、木内茶庵「薬街操觚界の思ひ出」、一四面。
(六〇)前掲、『随聞随筆総房人物論誌』第二編、三六-三七頁。
(六一)松風散史編『千葉繁昌記』藤井三郎、一八九五年、政党団体の部一頁。
(六二)『立憲改進党報』三〇号、一八九四年、三八頁。
(六三)前掲、『房総人名辞書』、五七〇頁。
(六四)喪架空「政客百面相（一）—関和知君」『財界レヴュー』二巻八号、一九二四年、六一頁。
(六五)『東京朝日新聞』一九二〇年一一月二四日、五面。
(六六)前掲、五十嵐重郎編『房総人名辞書』、四八三頁。
(六七)『新総房』一号、一八九六年、一頁。
(六八)『東京朝日新聞』一八九七年一月七日、八面。
(六九)『房総日日新聞』一九二五年二月二三日、二面。
(七〇)前掲、経済之日本社編輯部編『奮闘努力近代立志伝』、一四七頁。
(七一)『新総房』三号、一八九七年、三三頁。
(七二)同書、三三頁。
(七三)『新総房』四号、一八九七年、四-八頁。
(七四)同書、三六頁。
(七五)前掲、『新総房』三号、三頁。
(七六)前掲、『新総房』四号、四頁。
(七七)『新総房』五号、一八九七年、二頁。
(七八)前掲、『新総房』四号、四〇頁。
(七九)『新総房』六号、一八九七年、四〇頁。
(八〇)白洋子「柏田知事」『新総房』五号、一八九七年、一七頁。
(八一)前掲、『新総房』六号、四一頁。
(八二)『東京朝日新聞』一九二〇年一一月二四日、五面。
(八三)前掲、『新総房』五号、四一頁。
(八四)『進歩党党報』一号、一八九七年、前四頁。
(八五)前掲、『進歩党党報』一号、一〇-一一頁。
(八六)『新総房』七号、一八九七年、三〇頁。
(八七)見聞子「演説会所見」、同書、二五頁。
(八八)前掲、『新総房』七号、三〇頁。
(八九)『進歩党報』六号、一八九七年、三七頁。
(九〇)千葉県議会史編さん委員会編『千葉県議会史』千葉県議会、一九六五年、二二五頁。
(九一)前掲、『新総房』七号、三六頁。
(九二)『新総房』八号、一八九七年、目次次頁。
(九三)同書、一頁。
(九四)同書、三頁。
(九五)『房総日日新聞』一九二五年二月二三日、二面。
(九六)『新編江藤淳文学集成』河出書房新社、一九八五年、一四七頁。
(九七)『新総房』一九〇九年一二月一五日、二面。
(九八)前掲、大沢中「房総の新聞興亡史（一）」、二六頁。
(九九)『房総日日新聞』一九二五年二月二三日、二面。
(一〇〇)前掲、加藤友康・由井正臣編『日本史文献解題辞典』、五五五頁。
(一〇一)『新総房』一九〇三年四月二三日、二面。
(一〇二)『新総房』一八九七年一一月一九日、四面。
(一〇三)『新総房』一八九七年一二月一八日、二面。
(一〇四)『新総房』一八九七年一二月一二日、三面。
(一〇五)『新総房』一八九七年一二月二一日、二面。
(一〇六)『新総房』一八九七年一二月一六日、二面。
(一〇七)『新総房』一八九七年一二月一八日、二面。
(一〇八)『新総房』一八九八年一一月二三日、三面。